

痴呆老人はどのような音を覚えているのか サウンドスケープ・デザインへ向けての基礎的研究

What kinds of sounds can elders affected by dementia recollect?
: Toward soundscape design

永幡幸司

Koji Nagahata

福島大学

Fukushima University

内容梗概：本研究では、痴呆を患ったお年寄りの生活環境における音環境の改善へ向けての基礎的研究として、彼らがどのような音を容易に思い起こすことができるのかについて検討した。具体的には、痴呆を患ったお年寄りに対し擬音語を書いたカードを呈示し、そこからどのような音を思い出すことができるのかという調査を行なった。その結果、痴呆のお年寄りが擬音語から思い起こすことのできる音は、彼らがこれまでの生活の中で非常に親しんでいた音であったり、何らかの意味で強く意識していた音であったりというように、彼らのこれまでの生活経験と特に密接な関係を持った音であることがわかった。

1 はじめに

音環境は私たちを取り巻く生活環境の中の一つの重要な要素であることは言うまでもない。それは、痴呆を患っているお年寄りにとっても同様であると考えられ、それゆえ、痴呆のお年寄りの生活環境の改善を考える際に、音環境の問題も無視することはできないと考える。

痴呆を患った人の手記によれば [1]、何か音が聞えた時、それが一体何の音であるのか、すぐに思い浮かべることがとても困難であると述べている。そして、それが何の音であるかわかるまで、馴染みのないとても奇妙な感じを覚え、強いストレスを感じると述べている。

また、高橋 [2] は、痴呆のお年寄りの異常行動はもの忘れに起因する不安が引き起こしていることを指摘し、不安を取り除けば異常行動はおさまると述べている。さらに

倉鋪 [3] は、お年寄りのストレスを取り除いていくようなケアの試みが行なわれるようになってきていることを述べている。

これらの指摘は、痴呆を患うお年寄りにとって何の音であるのか思い浮かべやすい音と思い起こしにくい音があるならば、思い起こしにくい音を生活環境の中からできる限り取り除くといった対策をとることによって、彼らの生活環境を大きく改善できる可能性があることを示唆している。

そこで本研究では、痴呆を患っているお年寄りの生活環境における音環境の改善へ向けての基礎的研究として、彼らがどのような音を容易に思い起こすことができるのかについて検討した。

2 調査概要

本研究では、痴呆老人デイケア施設を利用している痴呆のお年寄りに対し、擬音語

を書いたカードを呈示し、それを声に出して読んでもらい、それから思い出す音について自由に語ってもらうという調査を行った。

調査対象者は、出雲市にある痴呆老人デイケア施設であるエスポワール出雲クリニック「小山のお家」の通所者14名であり、中程度から高度の痴呆を患っている。彼らは、小山のお家でのデイケアプログラムとして、固定メンバーを対象とした集団精神療法を日常的に受けている [2, 4]。

調査は、2001年2月23日のデイケアのプログラムの一環として、午後の全体プログラムの中で行なわれた。具体的な調査手順は次のとおりである。

調査対象者である痴呆を患ったお年寄りは、ケアリーダーを中心に自由な位置に座る。ケアリーダーは擬音語を書いた画用紙大のカードを調査対象者たちに対して呈示する。調査対象者とケアスタッフは、呈示されたカードに書かれた擬音語を数回繰り返して声に出して読む。その後、調査対象者はその擬音語がどのような音を表わすものであるのかについて自由に発言し、さらにその音にまつわる話などを自由に発話する。この際、ケアリーダー及びケアスタッフは、合いの手を入れるなどすることで、調査対象者が発話しやすい環境づくりを積極的に行なっている。調査の様子は、ビデオにて収録した。調査の様子を示す写真を図1に示す。

調査に用いた擬音語を書いたカードは、市販のスケッチブックに、1ページにつき1語の擬音語が黒のマジックペンで書かれたものである。擬音語としては、動物の鳴き声等の自然にまつわる音を表わすもの、家事の際に出るような音を表わすもの、古く行なわれていた慣習にまつわる音を表わすもの等多岐に渡ったものが100語程度用意された。本調査の中では、その中から表1に示す24語が用いられた。

また、調査対象者と音との関わりについて、調査対象者の家族を対象とした質問紙調査を行なった。調査項目は、表2に示すとおりである。



図1 調査の様子

表1 本調査で用いた擬音語

カーン、カシャ、カシャカシャ、カタカタ、カチ、カチカチ、カチコチ、パチパチ、コツコツコツ、トントン、ザーザー、ピヨピヨ、モー、ピーヒャラ、ポトポト、ブーン、リンリン、ザブン、チャリン、ギコギコ、ドスドスン、シーン、ジー、サー

表2 調査対象者の家族を対象とした質問紙調査の質問項目

1	調査対象者が生活の中で音に注意を払っていたことを示すようなエピソードについての自由記述
2	調査対象者が、ある特定の音を出す事物に対して、深い関係を持っていたことを示すようなエピソードについての自由記述
3	その他、調査対象者と音との関係についての自由記述

2.1 本調査で擬音語を用いた理由

本調査で擬音語を利用したのは次の2つの理由からである。

1つは擬音語の持つ性質による。例えば芋坂が指摘するとおり、一つ一つの擬音語は特定の現実の音と非常に強く結び付くことで「『音の風景』のイメージをリアルに再現させる」[5]ような言語表現である。したがって、ある人が擬音語から何らかの音を思い出し、その音について語るができるということは、その人がその音についての記憶を持っていることの現れであると考えられる。

もう1つは、実際の音や録音された音は記憶の中の音と異なっている場合があるからである。実際、本研究の予備調査として、CDに録音された古く行なわれていた慣習にまつわる音や環境音などを、本研究の調査対象者であるお年寄りたちに聴かせた際に、いくつかの音に対して、それぞれ別の調査対象者から、CDの音は自分の記憶の中にあるその音とは違うという内容の指摘が得られている。それに対し、1つの擬音語とある特定の音との間の結び付きは、その擬音語が忘れられてしまった場合を除いて変わらないと考えられる。

3 結果

各擬音語に対して調査対象者が述べた音についての発話の内容を表3に示す。表中、M1～M3は男性の調査対象者、F1～F6は女性の調査対象者の発話であることを示し、S1～S3はケアスタッフの発話であることを示している。また、表中には、リーダーに対しての発話、及び、ケアスタッフを介してグループ全体に紹介された発話のみを示している。調査時には、擬音語によっては調査対象者同士が相談する場面や、調査対象者とケアスタッフが会話をしたものの全体には紹介されなかった場面等が見受けられたが、そのような場面での発話は表中に含まれていない。

また、表3にはそれぞれの擬音語についての話題の継続時間も記したが、この継続時間とそれぞれの擬音語に対して何らか

の発話行動をとった人の数や発話内容の豊富さ等との間には、単純な関係はみられなかった。これは、例えば「ピヨピヨ」や「モー」などのように擬音語を書いたカードを呈示してから最初の発話があるまでの時間が短かく、さらに短時間の間に集中的に発話が得られた擬音語もあれば、「カシャ」のように話が呈示した擬音語を離れて膨らんでいったような擬音語もあり、さらには「カチコチ」のようにスタッフが色々呼び水となるような発話を試みても、調査対象者の誰も何も思いつかなかったような擬音語もあるというように、呈示した擬音語によって発話の起こり方が様々であったためである。

調査時に観察された調査対象者の行動には、次のような特徴が見られた。擬音語のカードを見せたときに、何らかの発話行動（例えば回りの人と相談する等）を起こした人の数に着目すると、多くの調査対象者が何らかの行動を起こす擬音語と、ごく少数の調査対象者のみが行動を起こすようなものがあった。具体的には、「ザーザー」「ピヨピヨ」「モー」「ブーン」といった擬音語に対しては、表3に示した発話に加えて、性別を超えた多くの人が回りの人と話す等の何らかの発話行動をとった。それに対し、「カチ」「カチコチ」といった擬音語に対しては、ほとんどの人が何も反応を示さなかった。また、「カシャ」については、女性は調査対象者F2の「金(かね)のものがぶつかった時の音。缶みたいなのとか、お鍋。」という発話に対して頷いたり、まわりの人と会話するなどの行動をとっていたのに対し、男性は「カシャカシャ」という擬音語に対し「カシャカシャは雑音でいけん」という趣旨の発話をしたM2が、F2の発話を受けて「男の人には雑音」という趣旨の発話をしたこと以外には発話行動は見られなかった。

次に、個々の擬音語に対する調査対象者の発話のうち、特徴的なものについて、回答された音の種類に着目して検討する。

表 3 各擬音語に対する調査対象者の発話内容

「カーン」 (4'40")

F1: 鉦を叩いた音
M1: お寺さんでカーン。
家だとチーンとかキン。
「お寺さんだと響くんだよ」
F1: カーンとなるのとキーンと聞えるのがある。
F2: 厚さによって音が違う?
F1: 鉦はカーンというのが頭に入っている

F1: 野球のボール

「カシャカシャ」 (5'52")

M2: カシャカシャは雑音でいけん。良い音が良い。
お寺のカーンの方が良い。厳かな感じの音。
S1: 他に厳かな音はないか?
M2: お寺の鐘。ゴーン

M3: 機関車

F3: 雑音

「カシャ」 (1'46")

F2: 金(かね)のものがぶつかった時の音。缶みたい
なものとか、お鍋。
M2: 男の人には雑音

「カタカタ」 (3'52")

M2: これも雑音

M3: 汽車
M1: 汽車はガタンガタン

S1: 昔、下駄を履いてカタカタというのを思い出した。
F4: 覚えがありますねえ

「カチ」 (1'38")

F1: ライター

「カチカチ」 (2'32")

M1: かちかち山

M1: 火打ち石
F1: 昔は「いってらっしゃい」の意味。
M2: 「無事でいってらっしゃい」「怪我をしないよ
うにいったり来い」という意味がある。

「カチコチ」 (2'18")

M1: こんなものないぞ

- リーダーに対しての発話、及び、スタッフを介してグループ全体に紹介された発話のみを示す。
- 「」で囲った発話は発話者の発話そのものであることを示す。他の発話は発話内容を要約してある。
- 表中の M1 ~ M3 は男性の調査対象者の、F1 ~ F6 は女性の調査対象者の、S1 ~ S3 はスタッフの発話であることを示す。また、? は誰が最初に発話したのかわからないことを示す。
- 行の空きがなく複数人の発話が記載されているところは、直前の発話を直接受けた発話であることを示す。
- 擬音語の後の () 内の数値は、話題の継続時間を示す。

「バチバチ」 (3'32")

F1: (拍手をする)

F5: 弾ける音。はぜる音
F4: ものを燃やした時の音

M1: パチンコ

M3: 拍手

「コツコツコツ」 (2'02")

M3: 金をためる(音?)

「トントン」 (2'06")

F3: 戸を叩く
(全体で『とんからりん』の唄を2回歌う)

「ザーザー」 (3'10")

F5: 滝の流れ

F6: 雨が降ってザーザーザーザー

M1: 砂をダンプから下ろす

「ピヨピヨ」 (1'24")

F6: ひよこ

M1: ひよこ

「モー」 (1'53")

M3: 牛
M1: 牛の声

「ピーヒャラ」 (2'01")

(何人かで相談しながら): 鳥の声
F2: とんび

F6: 笛(『村祭り』を歌い出す)

「ポトポト」 (1'32")

M1: 水の落ちる音

M3: 小便

「ブーン」 (1'43")

?: 蜂

F2, M1: 飛行機

M1: 蚊や蠅

「リンリン」 (2'31")

M1: ベルの音

M3: 電話

F1: 自転車のベル

S2: 『虫の声』のさびを歌う
F6: 「鈴虫だ！」

「ザブン」 (1'18")

F5: 川へおちる
M1: ドブン、ドボンとも言う

F1: 波の音

「チャリン」 (2'20")	
F5:	巡礼用(ご詠歌を唱うとき)の鉦
S2:	貯金箱に金を入れた時
M3:	「好きですわね」
M1:	お金を落した時の音
「ギコギコ」 (2'20")	
F2:	ノコギリで何かを切っている音
M1:	舟を漕ぐ音
「ドスンドスン」 (2'09")	
M1:	ものが落ちる音
S3:	お相撲さんの土俵入り
S2:	屋根の雪が落ちた音
M1:	それが一番だ
「シーン」 (1'25")	
M1:	蝉
F4:	しずかな時の音
「ジー」 (3'53")	
F6:	こおろぎ
F1:	蝉の声
?:	みみず
「サー」 (2'19")	
M2:	水の流れる音
M3:	「さー!行こう!」

3.1 自然の音について

前述のとおり、「ザーザー」「ピョピョ」「モー」「ブーン」といった擬音語に対しては、性別を超えて多くの人々が、回りの人と話すなどの何らかの発話行動をとった。さらに、これらの擬音語に対する擬音語を呈示してから最初の発話があるまでの時間は、比較的短いものがほとんどであった。特に、「ピョピョ」については、擬音語を呈示してすぐに「ひよこ」という回答が得られている。これらの擬音語の特徴は、動物の鳴き声や自然環境の音といった、「人工」に対する意味での「自然」の音を意味する擬音語ということである。この結果は、今回調査対象としたお年寄りたちにとって、「自然」の音は思い出しやすいということの意味していると考えられる。

今回の調査を行なった出雲地方は、現在でも自然環境がよく残っており、日頃から

「自然」の音を聞くことはごく普通のことである。このような環境で暮らし続けてきたことが、多くの人々が「自然」の音を思い出しやすいということの要因の1つではないかと考える。

3.2 家事にまつわる音について

今回の調査で用いた擬音語の中では、家事にまつわる音を表わすものとして回答のあったものは、「カシャ」と「パチパチ」の2つであった。

このうち、「カシャ」という擬音語に対しては、前述のとおり F2 から「金のものがぶつかった時の音。缶みたいなものとか、お鍋。」と回答があり、女性の間でのみ、まわりの人と会話するなどの行動が観察された。また、「パチパチ」という擬音語に対しては、「弾ける音。はぜる音」、「ものを燃やした時の音」という家事にまつわるような音であるとする回答は、女性からのみ発話された。

ここで、「カシャ」について着目する。家族アンケートの結果を見ると、「台所で私になべのふたなど落す事が時々あると、少し離れた場所においても、『おぞやなー、何事をすうか〜。』と言われていた」とか、「茶碗かごからの音など音の大きな音はいやがります」など、鍋や食器による大きな音が調査対象者たちに嫌われていたことを示す回答が複数の家族より、家族の女性からの回答として得られている。これは、少なくともこの地方の調査対象者たちと同年代の人々に、このような音はたてるべきでない音として広く嫌われていたことを示唆しており、それゆえ、女性たちはできるだけこのような音はたてないよう心掛けていたと考えられる。そのように考えると、鍋や食器を扱うことの多い女性にとって、これらの音は単に馴染み深いだけでなく、気をつけなくてはならない音という強い意味を持った音であったと言える。そのことが、この擬音語に対し、女性のみから反応が得られたことの要因であると考えられる。

同様に考えると、「パチパチ」という擬音語に対し、家事にまつわる音であるとする回答は女性のみから得られたという

ことも、調査対象者たちの世代において家事は、女性にとってはごく日常的な行動であっても、男性にとっては縁遠いものであったことが要因であろうと推察される。

3.3 古くからの慣習にまつわる音について

「カチカチ」という擬音語に対し、M1が「火打ち石」の音であると発話したのに続けて、F1は火打ち石を叩くジェスチャーを交えながら「昔は『いってらっしゃい』の意味」であったことを語り、それに続けてM2は「無事でいってらっしゃい」とか「怪我をしないようにいって来い」という意味があったことを語った。このように、この擬音語からは単にそれが何の音であるかが思い出されたばかりではなく、その音にまつわる様々な記憶が呼び起こされていた。

このことから、自分にとって馴染みの深い慣習の音は、お年寄りにその音にまつわる様々な記憶まであわせて思い起こさせるのではないかと考える。

3.4 個々のお年寄りにとって思い入れの深い音について

呈示された擬音語が、個々のお年寄りにとって特に思い入れの深い音についてのものであった場合、調査対象者からは、単にその擬音語が何の音の意味するものであるのかについての発話だけではなく、その音についての思いやその音にまつわる思い出等もが語られた。

例えば、M3は予備調査としてCDの音を聞かせた時に、梵鐘の音に非常に強い関心を示していたが、彼は「カシャカシャ」という擬音語に対し「雑音でいけん」と発話したのに続けて「音は寺の鐘のような響のある音じゃないといけん」「厳かな感じの音(が良い)」という発話を行ない、厳かな音の例として「お寺の鐘」の「ゴーン」という音を挙げている。

また、F6は、家族アンケートによると「音で好きな音はたぶんリズム感のあるお祭りのおはやしとか、童謡とかだと思われます。昔から自分の興味をそそることに関係のある音には敏感なのかもしれませ

ん。」という回答が得られているが、彼女は「ピーヒャラ」という擬音語に対し、お祭りの笛であることを指摘し、さらに童謡の『村祭』を歌い出している。

さらに、3.3で示した「カチカチ」に対するF1及びM2の発話やジェスチャーも、彼らにとって火打ち石の慣習が思い入れの深いものであったことを意味しているのではないかと考える。

以上でみてきたことより、痴呆のお年寄りが擬音語から思い起こすことのできる音は、彼らがこれまでの生活の中で非常に親しんでいた音であったり、何らかの意味で強く意識していた音であったりというように、彼らの生活との間に特に密接な関係を持った音であると結論づける。

3.5 調査対象者 M1 の回答パターンについて

上述のように、今回の調査対象者は、各々のこれまでの生活経験との間に特に強い関係を持った音についての擬音語に対してのみ、それが何の音であるのかについての発話をしていると考えられる。それゆえ、ほとんどのお年寄りは、一人一人見ると限られた擬音語に対してしか発話していない。

それに対して、M1は音の種類を問わず、非常に多くの擬音語に対して発話をしている。さらに、彼の発言内容に着目すると、「カチコチ」に対する「こんなものないぞ」という発話や、「カーン」という擬音語に対する「お寺さんでカーン」「家だとチーンとかキン」に見られるように、様々な音に対してそれが何の音であるのか非常に細かく、分析的に聞き分けていると考えられるような発話が見られる。これは、他のお年寄りには見られない特徴である。

ここで、M1の家族アンケートの結果を見ると、「本人自ら、『わしは気が小さくて怖くていけん』と言うぐらいですから、どんな音でも大きな音はいやがります。」「大きな声、音イコール敵がせめて来る様に思うようです。」という回答が得られている。この回答と、分析的な音の聞き分けを示すような発話パターンをあわせて考えると、この調査対象者は、戦時中に音によっ

て敵襲か否かを聞き分けるというような体験をすることにより、身を守るために、どんな音であってもそれを注意深く聞くというような習慣が出来上がり、普段から音を分析的に聞いていたのではないかと推察される。

このように考えると、他のお年寄りとは表面的には違った発話のパタンをしているM1は、生活の中の全ての音を注意深く聞いているという意味で、彼の生活経験と特に強い結び付きを持った音についての擬音語に対して発話をしていると言えよう。すなわち、M1においても、他のお年寄りの場合と同様に、彼の生活経験と特に強い関係を持った音についての擬音語について、それが何の音であるのかを思い起こすことができているのである。

4 考察

3章で述べたように、今回の調査対象者が擬音語から思い起こすことができた音は、彼らのこれまでの生活経験との間に特に密接な関係を持った音であった。このことは、痴呆を患ったお年寄りの生活空間の音環境をデザインする際には、個々のお年寄りのライフヒストリーを十分に考慮したものである必要があることを示していると言えよう。

しかしながら、調査対象者からの発話で挙げられた音を見ると、その多くは個々の調査対象者固有の生活の中でのみ聞かれるような特殊な音なのではなく、むしろ、誰にとっても日常生活の中でごく普通に聞くことが可能であった音であると言えよう。このことは、個々のお年寄りのライフヒストリーを考慮した音環境デザインと言っても、別段特殊な音を仕掛けることが望まれるのではなく、むしろ、彼らが日常生活の中で聞いていた音を、現在の日常生活の中でいかに自然に聞えるようにするのかを考慮することが必要であることを示唆するものであると考える。

さらに、調査対象者が思い出すことができた音の多くは、同じ地域に住んでいた彼らと同世代の人々であればごく日常的に聞

くことができた音のうち、個々人が特に注意を払っていた音であると言い換えることもできるであろう。このように見ると、老人ホームやデイケア施設のような多数のお年寄りが集うような施設における音環境についてデザインする場合においても、利用する世代の方々が日常生活の中で聞いていたような音を、いかに自然に聞えるようにするのかを考慮することによって、利用者にとってストレスの少ない音環境が実現できるのではないかと考える。

また、今回の調査対象者が擬音語から思い起こすことができた音は、彼らが日頃から聞いている音の中で、特に意識的に聴いていた音であるということも可能であろう。特に、3.5で述べたM1の発話パターンは、それを強く支持する。このことは、痴呆を患う前から、自分の周りを取り囲んでいる音に対してどれだけ注意を払っているかが、痴呆を患った後でどれだけ音を思い出すことができるかに大きく関わっていることを意味している。これは、マリー・シェーファー [6] の説く「自分の周りの音をより深い批評力と注意力をもって聴けるようにする」ことの重要性を裏付けるものであり、それを実現するためのサウンド・エデュケーションの必要性を示唆するものである。

さらにこのことは、私たち自身が今、日常生活をする空間の音環境が、将来的に痴呆になった場合に安心感が得られる音環境を決定づけることを意味している。それゆえ、現在、自分たちが生活する音環境をデザインする際に、それが将来に及ぼす影響を十分に考慮する必要がある。

5 結論

本研究では、痴呆を患ったお年寄りがどのような音を容易に思い起こすことができるのかを明らかにするための第1段階として、彼らはどのような擬音語からそれが何の音であるのかを思い起こすことができるのかについて調査した。

その結果、次のようなことがわかった。

1. 動物の鳴き声や雨の音のような「自然」の音は、性別を超えて、多くの人にとって思い起こしやすい音であった。
2. 家事にまつわるような音は、女性にしか思い起こされなかった。
3. 古くからの慣習にまつわる音は、それが何の音であるのか思い出せる人には、非常に明確に思い起こされた。
4. 個々のお年寄りにとって思い入れの深い音は、非常に良く思い起こされた。

これらの結果より、痴呆のお年寄りが擬音語から思い起こすことのできる音は、彼らがこれまでの生活の中で非常に親しんでいた音であったり、何らかの意味で強く意識していた音であったりというように、彼らの生活と特に密接な関係を持った音であると結論づける。

それゆえ、痴呆のお年寄りの生活環境の音環境をデザインする際には、彼らが日常生活の中で聞いていた音を、現在の日常生活の中でいかに自然に聞えるようにするのかを考慮することが必要であると考えます。

参考文献

- [1] Christine Bordrn: Who will I Be when I die?, (Harper Collins Religious, Australia, 1997), pp.67-72.
- [2] 高橋幸男, 石橋典子: 痴呆性老人とデイケア, 私たちが考える老人ホーム, (中央法規出版, 東京, 1996), pp.89-134.
- [3] 倉鋪桂子: 痴呆症による障害と看護, 形成期の痴呆老人ケア, (北大路書房, 京都, 1999), pp.233-239.
- [4] 三好典子: 「小山のおうち」のデイケアのようす, 形成期の痴呆老人ケア, (北大路書房, 京都, 1999), pp.138-147.
- [5] 苧阪直行編著: 感性のことばを研究する, (新曜社, 東京, 1999).
- [6] R. マリー・シェーファー (鳥越けい子, 若尾裕, 今田匡彦訳): サウンド・エデュケーション, (春秋社, 東京, 1992).

謝辞

本研究を遂行するにあたり、ご議論、ご協力いただいた福島県立医科大学の福島哲仁教授(元福岡大学医学部助教授)、小山のおうちのスタッフの皆様、そして、調査にご協力いただいた小山のおうちの通所者の皆様とそのご家族に感謝の意を表す。

本研究は、福島哲仁教授を研究代表とする共同研究「痴呆高齢者にとってのバリアフリーと人生の豊かさの再開発」の一環として、平成12年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))の補助を受けて実施したものである。